

ヴァルター・ベンヤミンにおける注意 Aufmerksamkeit 美学

—— 注意力の形式化としてのメディア論にむけて

木戸 吉則 (京都大学)

ベンヤミンは「メディアの理論家としてしか理解できない」。ノルベルト・ボルツとはあるインタビューにおいてそのように語っている。メディア理論の文脈でベンヤミンを読むのなら、写真や映画といったメディア技術を直接論じた論稿に注目するのが通常だが、ボルツは *Theorie der neuen Medien*(1990)などで、そうした具体的なメディア技術への言及の有無に関わらず、ベンヤミンをメディア理論として読み得ることを強調している。ベンヤミンは『パサージュ論』断章[K3, 3]で、映画に関して、「こんにちの機械において前成されたすべての直観形式、テンポ、リズムを取り出したものであり、こんにちの芸術のすべての問題が、映画との連関においてのみその最終的形式化を見出すほどである」と述べている。これを踏まえると、単に映画を直接議論の題材とすることが「メディア理論家」としてのベンヤミンであると言うわけにはいかない。あくまでもベンヤミンは「直観形式」や「テンポ」、「リズム」という知覚に関わる要素を分析するために映画に着目しているのだ。すなわち、人間の知覚に関わる技術がすべてメディアと何かしらの繋がりを持っており、ボルツの発言の念頭には、技術水準や知覚形式の連関を扱うことがメディア理論であるという定式化があった。

もちろん、「メディア理論家」としてのベンヤミンというイメージは、ボルツのいうように、具体的なメディア技術への研究を超えた範囲でも多く見られる。しかし、上で引用した発言にある、「直観形式」「テンポ」「リズム」といったトピックにまで、メディアを抽象化させて論じられることはなかった。そこで本報告では、ベンヤミンが「直観形式」、すなわち対象知覚の方法を、「テンポ」や「リズム」といった時間的要素とどのように接続させて論じていたのかを問題とする。このとき鍵となるのが「注意 Aufmerksamkeit」である。ベンヤミンはボードレール論において、産業構造の変化や技術発展における人間の時間意識の変化、主に時間経験における持続が切り詰められ、一つの対象へ注意を注ぐ時間が断片化されていく状況を描いている。また、「複製技術」では、映画を集中ではなく、気の散った状態(=気散じ)での受容の訓練装置と言っている。そしてベンヤミンは、気散じや断片的な時間に、既存の世界の見え方を変える力を見ている。

上述のように「注意」に着目してベンヤミンを読むことで、その「メディア理論」は、人間の経験のメカニズムを時間意識のもとで分析する手法へと捉え直され得る。そして、経験の貧困化などと否定的に解釈されがちな、メディア技術の発展とそれに伴う人間の知覚の変化のなかに、ベンヤミンが見出そうとした積極的な側面、すなわち世界の見え方を変える方法が、具体的な方法論として見出される。